

エントレインメント

七木田 方 美

生後間もなくの乳児が、大人の表情や口の動きを模倣したり、2か月を過ぎるころには音声まねることをご存知でしょう。これらは、意図した「模倣」ではなく「共鳴動作」であり、意図の介入のないまま、反射的に自動的に生じてしまうものです。これをエントレインメント（引き込み現象）といいます。

エントレインメントは、親しい間柄の人が共にいることで生じるものであり、名づけたのはCordonです。彼は家族団らんの場においては、コミュニケーションが円滑に行われている時には、家族が発話に同期し、身体の動きをお互いに同調させる、自己組織的現象が見られることを確認し、これを「エントレインメント」と名づけました。そして、コミュニケーション時におけるエントレインメントの重要性を示しました（Condon, W. S. 1986）。

Hallは、小学校の校庭で遊んでいる児童を観察し、一人の女の子がまるでダンスをするように校庭を移動すると、最初ばらばらであった子どもたちの遊びに共通のリズムが出現し、それが同調しながら広がっていくことを報告しています。これもエントレインメント現象です（Hall, E. T. (岩田訳) 1979）。

Trevarthenらは、未熟児と、その父親とのやりとりにおいて、その子どもの表情や手の動きは、その子に触れる父親の手の動きや、その子に話しかける父親の声の調子と、アダージェットのようなテンポで同期すると報告しています（Trevarthen, C. 1974, 1977, 1988, 1999）。これらの結果は、言語的な理解ができない赤ちゃんであっても、身体には、リズムカルな外部刺激に対して引き込み、引き込まれるという機能が

備わっていることを意味しています。下の写真は、食事場面における親子のエントレインメントです。



「味わっているのは、どっち？」

日本におけるエントレインメント研究は、小林登、石井らのグループにより紹介されています。特に母親と乳幼児のコミュニケーションに着目し、子どもと養育者の身体の動きや声が同期することを報告しています（Kobayashi, N. 1992）（渡辺、石井、小林. 1984）（小林. 1988）。また、赤ちゃんを寝かしつけるとき、赤ちゃんとも母親の心拍や呼吸が同期し、共にゆっくりに

なっていくことで眠りにつくことも明らかにされています（渡辺. 1998）。

エンタテインメントは、他者や周囲の環境を感じ取り、それに合わせて自己調整するというコミュニケーションの原型なる機能であるといえるでしょう。

また、遠隔よりも対面コミュニケーションにおいて生成されやすい傾向があることや（渡辺、

大久保. 1998）、陽性感情において生じやすいことも言われています。

筆者は、0歳児の親子のクラスで、親子のエンタテインメント現象が生じる場面を見つけ、それをもとに意図的に親子の情動交流場面を創造しています。写真から、赤ちゃんと大人の表情が同じだということが分かります。気持ちも同じということも、想像できます。

